「ラドロウの奥様」における小説手法
── 視点の問題を中心に ──

足立　万寿子

はじめに

エリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-65）の小説のなかには、全知の視点（the *omniscient* point of view）[1] を採用しているものもあれば、また作中人物のひとりを「私」として、その目を通して小説世界を読者に伝えていく、いわゆる一人称小説の視点を採っているものもある。ギャスケルの中篇小説「ラドロウの奥様」（"My Lady Ludlow", 1858）は後者の視点を採っているが、その視点を採用するにあたってギャスケルはさまざまな手法を駆使し、小説の世界が現実の世界に近いごく自然なものにみえるように努力しているのが感じられる。私は本小論文において、この視点の問題に焦点をあて、「ラドロウの奥様」を考察していきたい。

I

この小説の主人公ラドロウ夫人はハンベリー（Hanbury）村の保守的な領主であったが、この村で起きるさまざまな事件に直面して考えを変えていく。ラドロウ夫人のこの変化の過程が半世紀ほど経たのち、語り手のマーガレット・ドーソン（Margaret Dawson）によって読者に語り伝えられていく。

マーガレットは小説の現時点では70歳近い老婦人になっているが、小説世界の中心はマーガレットの若いころ（およそ16～20歳）に設定されている。マーガレットは16歳のとき貧乏な牧師の父親を亡くしたあと、遠縁の貴族ラドロウ夫人にひきとられて、ハンベリー館（Hanbury Court）にやって来る。このよう

な境遇にいる少女はごく平凡な生活を送ってきており、経験も浅い。そのような狭い世界に生きているマーガレットがさまざまな人々のさまざまな出来事をごく自然に現実感を損わないで伝えるには限界があるのは当然である。このようなマーガレットが広い世間の出来事を描いても不自然にならず、またマーガレットが語る話に現実感があり、読者に納得してもらえるものになるように、つまりマーガレットが公平で優れた語り手にふさわしい条件を備えるように、作者ギャスケルは以下のような種々の工夫を凝らしている。

工夫の第1は、語り手自身にかかわること、つまりマーガレットの年齢、性質、身分、健康などについてである。マーガレットは若い。従って、まだ自分の価値観が固まっておらず、柔軟性があり、他人の意見を素直に聞く素地を有している。またマーガレットは、彫刻が施され金箔が張られ宝冠を戴いた、ラドロウ夫人用の椅子に関心を示し、座り心地を試すのに夫人が退出しているあいだに座ってみることから窺われるように、好奇心が強い。またマーガレットは初めてラドロウ夫人にお目通りしたとき、夫人が指輪をはめていたことまでも気づくほど鋭い観察力を持っている。またマーガレットは、ラドロウ夫人がマーガレットの母親へ出した手紙の文面を何十年も経っても覚えているほど記憶力がよい。これらはさまざまなことに興味を持ち、興味を持ったことを正確に把握し、忘れずに記憶しておくべき語り手にふさわしい性質である。

さらに、ハンベリー家の財産管理人ホーナー氏（Mr. Horner）から字を教えられて読み書きができるようになっていた下層階級の少年ハリー（Harry）が崖から落ちて大怪我をしたとき、ラドロウ夫人は「庶民のくせに字を覚えたからだ」という。ところがマーガレットは、夫人のこの論理はおかしいのではないかと疑問を抱く。この反応から、マーガレットが理性的な判断力を持っていることが窺われる。またマーガレットはただ冷静なだけでなく、ラドロウ夫人の跡取り息子ラドロウ卿が亡くなったときの村人の服喪の仕方と自分の父親の場合を比べて、一時嫉妬心を抱いたり、またラドロウ夫人の旧友ギャリンドー（Miss Galindo）が喋り過ぎたことを後悔したとき、ギャリンドーをやさしく慰め励ますが、逆にお節介はやめてほしいといわれてしばらく落ち込んだりするように、人間的弱点も持っているので、他人を思い遣ることもできる。加えて、このようなときに自

分を反省する謙虚さも持っている。そこで、このような人物ならば、報告をするのにも、自分のコメントを付すのにも、公正を期すだろうとの信頼感を読者に与えることができる。

その上、ギャスケルは、マーガレットが17歳のときスタイルから飛び降りて、腰を打ち、それがもとで身体障害者になるように設定している。体が不自由になることで、自分は行動しない、つまり「ドラマの中心にはまきこまれない」[2] 傍観者となり、「ドラマにまきこまれている登場人物の感情に左右されることなく」[3] 客観的に世間の動きを観察し、読者に報告するというデイヴィッド・セシル（David Cecil）がエミリ・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-48）の『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）の語り手について述べている[4] ような長所を持つことができる。

さらに、ノブレス・オブリージュを誠実に果たしており、また心のやさしいラドロウ夫人は体の不自由になった不幸なマーガレットをたえず自分のそばにおくようになる。そうなると、マーガレットは夫人に面会にくる人々と常に接することになり、自然とさまざまな情報を耳にすることができる。

その上、マーガレットは自分から話すよりも聞くほうが好きで、しかも聞き上手である。このように聞き手に徹しているマーガレットに人々は自分の思いや考えを自由に述べることができる。また、ハンベリー館で行儀見習として寄宿しているだけであり、しかも体が不自由な若い女性であるマーガレットに人々は利害関係もうすく、警戒心を抱くことなく話せる。

マーガレットのこのような状況は、マーガレットがさまざまな登場人物や出来事に注意を向け、それを客観的に観察し、また人々に発言を促すのに好都合である。

工夫の第2は、語り手をとりまく環境についてである。ギャスケルはマーガレット自身が知らないことを読者に伝えるのに、ほぼ常にマーガレットのそばにいるラドロウ夫人を据えているのは当然だが、若い教区牧師グレイ氏（Mr. Gray）とギャリンドーも配している。

グレイ氏は村人を信仰篤い敬虔な人間にするために日夜励んでいる牧師である。国教会の牧師ではあるが、ジョン・ウェスリー（John Wesley）のように村人の

家に出向いて、聖書を読んだり、祈祷をあげたりしている。従って、村人の動向についての情報を多く持っている。そのグレイ氏が領主ラドロウ夫人にあれこれ相談に来るときに、このふたりの会話を通してマーガレットが夫人やグレイ氏については当然のこととして、村の出来事や下層階級の人々のことも知ることができるのはごく自然な成り行きと読者に感じられる。

独身でお節介やきだが善意の中年女性ギャリンドーは遠慮なく村人の家のなかまで入っていき、村人に節約など指導している。さらにギャリンドーはお喋りである。このギャリンドーが毎日事務をとりにハンベリー館へやって来る。そのときギャリンドーは聞き上手なマーガレットにさまざまな話をするのはごく自然なことであり、マーガレットに多くの情報をもたらすのに適役である。

語り手マーガレットの面前に直接現れない人物、例えばホーナー氏の後任ジェイムズ大佐（Captain James）や、バーミンガムからハンベリー村に引っ越してきてパン屋を開き農業も営んでいるブルック（Brooke）一家なども、あたかも生きた人間のような存在感を持って小説世界に登場している。これは作者の優れた描写力によるのは当然であるが、語り手マーガレットにこのような環境を用意しているから可能であるともいえよう。

工夫の第3は会話を含む場面の多用である。これにより、視点がマーガレットひとりにあっても多くの人物の導入がごく自然に行われ、またマーガレットの説明が独断に陥らずに語り手としての客観性が保たれ、さらに各場面が生き生きとしたものになってくる。例えば、ハリー少年がホーナー氏からラドロウ夫人に手渡すようにと手紙を預かるが紛失してしまい、直接夫人に手紙の内容を口頭で告げようと思い、面会を求めた場面でのハリーと夫人が交わす会話がその好例である。

> ... in the opening there stood a lithe, wiry lad [Harry], with a thick head of hair, standing out in every direction, ...
>
> 'What do you want with me?' asked my lady, in so gentle a tone ....
>
> 'An't please your ladyship?' said he, as if he had been deaf. ....
>
> 'And he [Mr. Horner] left a note for your ladyship with me, your lady-

ship. .... Please your ladyship, I've clean gone and lost it.'

He never took his eyes off her face. If he had not kept his look fixed, he would have burst out crying.

'That was very careless,' said my lady, gently. 'But I am sure you are very sorry for it. You had better try and find it. ....'

'Please, Mum—please your ladyship—I can say it off by heart.'

'You! What do you mean?' I [Margaret] was really afraid now. My lady's blue eyes absolutely gave out light, she was so much displeased, and moreover, perplexed. ....

'Mr. Horner, my lady, has taught me to read, write, and cast accounts, my lady. ... he folded his paper up, but he did not seal it; and I read it, my lady; ... it seems like as if I had got it off by heart;' and he went on with a high pitched voice, saying out very loud what, I have no doubt, were the identical words of the letter, date, signature and all: ....

When he had done, he stood almost as if he expected commendation for his accurate memory.

My lady's eyes contracted till the pupils were as needle-points; it was a way she had when much disturbed. (pp.48-50) [5)]

との場面から、ハリー少年はラドロウ夫人の威厳に圧倒されつつも、字を覚えたことと記憶力のよさを自慢し意気揚々としていたが、ラドロウ夫人から褒めてもらえなくて当惑している、一方、ラドロウ夫人は面会の相手が下層階級の少年であっても、いつものように穏和な表情で礼儀正しく応対していたが、この少年が読み書きができることを知って驚き、不快感を露にしているさまが手にとるように読者に伝わってくる。このように、このふたりの様子は、読者が劇を観ているような錯覚に陥るほど現実感を持って描かれている。さらに、ふたりの会話のあいだに挿入されている語り手マーガレットの地の文の説明はほとんどが客観的な外面描写に徹し、劇の台本のト書のような効果をあげており、現実感を一層盛り上げている。

登場人物の直接の会話が不可能な状況では作者は代わりに手紙を利用している。

語り手が実際にその場に居合わすことができなくとも、手紙ではその状況をありありと読者に描いてみせることができるからである。小説の冒頭近くで、ギャスケルは主人公ラドロウ夫人がどのような人物であるかを読者に知らせるのに、まだ夫人に会ったこともない語り手マーガレットに夫人のことを説明させられないので、夫人がマーガレットの母親に宛てて書いた手紙を掲載して、簡潔な夫人の人物紹介としている。また小説の終結部で、ギャリンドーがマーガレットに宛てた手紙のなかで、マーガレットが3、4年過ごしたハンベリー館を去ったのちのハンベリー村の出来事を巧みに描いて、ごく自然に村の情報を読者に伝えている。

このような会話や手紙によって、形式的には語り手はマーガレットひとりだけであるが、実際は多くの人物が語り手になっていることから、読者には小説世界の広がりが無理なく感じられ、小説世界が現実感を帯びてくる。そして読者は自身は発言しなくとも、これらの会話に立ち会って、それぞれの登場人物が発言していることを直接耳にしているような感じ、つまり、あたかも劇を観ているような気分になり、聞き手として小説世界に参加しているような満足感を味わえる。

II

このように、「ラドロウの奥様」は一人称小説でありながら語り手についての工夫、会話、手紙などの導入によって、客観的、ないしは劇的視点（the *objective* or *dramatic* point of view）[6] を採っているような効果をあげ、生き生きとした現実感を生み出しているが、欠点もある。それは「私」として物語るマーガレットひとりに視点があるので、マーガレット以外の登場人物の内面を不自然にならずに詳細に描写することが不可能になることである。この欠点を克服するためにギャスケルは外面描写の積み重ねで内面を表す工夫をしている。例えばラドロウ夫人について語り手マーガレットは、

> She [Lady Ludlow] was very small of stature, and very upright. She wore a great lace cap, nearly half her own height, ... She had ... a black silk mode gown, ... with the tail thereof pulled through the pocket-hole, so as to shorten it to a useful length. .... Her hair was snowy white, ...:

her skin, even at her age, was waxen in texture and tint; .... She had a great gold-headed stick by her chair, but I [Margaret] think it was more as a mark of state and dignity than for use; for she had as light and brisk a step when she chose as any girl of fifteen, ... (pp.7-8)

と描写している。この描写から、小柄で高齢で優雅な衣装を身につけているラドロウ夫人が若々しさを保ち、実用も重視し、また貴族であることに誇りを感じているなどの内面が、豊かなレースのキャップ、裾を必要なら持ち上げられるようにポケット穴の付いたガウン、つややかな肌、金の取っ手の付いた杖、きびきびとした歩きぶりなどの外面によって的確に伝えられていることが分かろう。

その他、ギャスケルは、唯一存命していたがその子も死亡したラドロウ夫人の悲痛さを、夫人のコンパニオン役メデゥリコット（Mrs. Medlicott）が語る話とマーガレットが観察する夫人の外観からだけで描いている。夫人が語り手マーガレットにその苦しみを語って聞かせることもギャスケルはできたはずであるが、貴族は身分の低いものに自分の感情を見せないものだとマーガレットにいわせて、夫人が心の内を晒け出さなくとも読者に納得がいくように配慮している。それでいて、

But she [Lady Ludlow] sat in her own room, hung with black, all, even over the shutters. She saw no light but that which was artificial – candles, lamps, and the like – for more than a month. Only Adams [Lady Ludlow's waiting-maid] went near her. Mr. Gray was not admitted, though he called daily. Even Mrs. Medlicott did not see her for near a fortnight. .... She [Mrs. Medlicott] told us, ... that my lady sat there, ... in the middle of the darkened room; a shaded lamp near her, the light of which fell on an open Bible, – the great family Bible. It was not opened at any chapter, or consoling verse; but at the page whereon were registered the births of her nine children. .... (p.162)

.... My lady came amongst us once more. From elderly she had become old; a little, frail, old lady, in heavy black drapery, never speaking about

nor alluding to her great sorrow; quieter, gentler, paler than ever before; and her eyes dim with much weeping, never witnessed by mortal. (p.165)

との優れた外面描写だけで読者はラドロウ夫人の心の内の苦悩を充分察することができる。

この小説中でラドロウ夫人に次いで重要な役割を担っているグレイ氏については、まず、

He [Mr. Gray] was very red-faced, ...; he looked slight and short .... He blushed redder than ever at the sight of us [Margaret and another young woman], ... He coughed two or three times, as if he would have liked to speak to us, ...; and every time he coughed, he became hotter-looking than ever. I [Margaret] am ashamed to say, we were nearly laughing at him. (pp.21-22)

と描写されている。次いで、グレイ氏が村のならず者グレッグソン（Gregson）の誤認逮捕の件でラドロウ夫人と面談したとき、グレイ氏自身は正しいと確信して主張しているのに、夫人は認めようとしない場面は、

Mr. Gray drew himself up to his full height, with an unconscious feeling of dignity. Little as was his stature, and awkward and embarrassed as he had been only a few minutes before, ... he looked almost as grand as my lady .... (p.25)

と描写されている。この2箇所の外面描写によって、小柄で赤ら顔で社交下手で動作がぎこちないグレイ氏はおよそ魅力的男性にはみえないが、自分の信念を貫くためには非常に勇敢であるという内面が巧みに示されている。

例えば、ギャスケルの処女長篇小説『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)では危機に瀕したメアリの心の動きを作者があたかも劇場中継の解説者のように描写しているが、センチメンタルな印象を与えかねない[7]。しかし、「ラドロウ

の奥様」ではそのような弊害を回避し、人間の内面をできるだけ客観的に描くのに成功している。

その他、ギャスケルは登場人物の内面を客観的に描くのに、エピソードを駆使している。ラドロウ夫人が責任感が強い点はグレッグソンの冤罪事件のエピソードによって、頑固に庶民教育に反対している点は教会の家族席のまわりに窓付きの囲いを立てさせたエピソードによって、庶民に偏見を抱いている点は女中を採用するときの面接のエピソードによって、身分の下のものが上のものに従順にすべきことを当然と思っていることはカラスのパイを食べるように領主から命令されてそれに従った牧師のエピソードによって、それぞれ表すようにしている。グレイ氏が邪心のない信頼のおける人物であることは、普通は見知らぬ訪問客には吠えつくハンベリー家の猟犬がグレイ氏には親愛の情を示したエピソードによって示している。

このように外面描写やエピソードの積み重ねによって登場人物の内面を表そうとする工夫は、一人称の語りで伝えられる小説世界をなるたけ現実世界に近い自然なものにみせようとするためであろう。実際の生活では、他人の心のなかを覗いてみることは不可能なことで、その人のさまざまな外見や言動、あるいは人から聞いた話などを総合して、その人の性質や心理の動きなどの内面を推察するのが普通だからである。

ある青年小説家が自分の書いた小説についてギャスケルに批評を求めてきたことがあった。そのときギャスケルは、

> ... I think you must observe what is *out* of you, instead of examining what is *in* you. ... I believe ... that we ought not to be too cognizant of our mental proceedings, only taking note of the results. .... Just read a few pages of De Foe &c—and you will see the healthy way in which he sets *objects* not *feelings* before you. [8)]

とのアドヴァイスの手紙を送っている。この文面からギャスケルが、リアリスティ

クな描写に徹したダニエル・デフォー（Daniel Defoe, ?1660-1731）のように、目にみえない内面を描写しようと腐心するのでなく、目にみえる外面を客観的に描こうとする態度が小説家にとって大切だと考えていたことが窺える。

Ⅲ

フランス革命期の青年貴族クレマーン・ドゥ・クレーキー（Clément de Créquy）とその従姉妹の悲劇的事件の長々しいエピソードはこの小説の価値を下げるものだとしばしば非難されている[9]。しかし、このエピソードも視点の観点からみると非常に興味深い。小説全体の語り手はマーガレットであるが、このエピソードの語り手はこの青年貴族一家と知り合いのラドロウ夫人になっている。しかも話の中心部分については、ドゥ・クレーキー家の財産管理人とその友人がロンドンに亡命してきたとき、ロンドンの住居にいた夫人を訪問し、語って伝えた設定になっている。さらに話の核心部は、ドゥ・クレーキー家の門番の息子がフランス人捕虜としてイギリス南部の収容所に入れられていたとき、たまたまそこを視察に訪れた夫人に語って伝えたという設定になっている。まさに劇的視点が採られているといってもよいほどである。このエピソードには多くの登場人物が出てくるが、ギャスケルの巧みな筋運びとこのような語りの手法で、読者に混乱なく事件の経過が伝えられ、読者は広い小説世界を現実の世界のように受け入れていくことができる。

また、このエピソードはチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）の『二都物語』（*A Tale of Two Cities*, 1859）の先駆ともいわれている[10]ほど、息もつかせぬスリルとサスペンスに溢れ、スケールの大きな映画を観ているような印象を読者に与え、読者の興味を惹きつけていく力を持っている。

Ⅳ

「ラドロウの奥様」は、しばしば『クランフォード』（*Cranford*, 1851-53）と比較されている[11]。それは、どちらも週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』（*Household Words*）に連載されたこと、エピソードの積み重ねで小説が構成されてい

ること、平穏な村または田舎町が舞台になっていること、一人称小説であることなどによっている。本論文では最後の点、すなわち視点の問題をとり上げ、両者を比較してみたい。

『クランフォード』の語り手はメアリ・スミス（Mary Smith）という若い女性である。メアリは元はクランフォードという田舎町に住んでいたが、父親の仕事の関係で隣の大都市へ引っ越し、ときどきこの田舎町を訪れ、ここの出来事を読者に伝えていくという設定になっている。メアリは観察力が鋭く、行動力があり、ユーモアを解しつつ、やさしい心も持っている。メアリはクランフォードの上・中流階級に属する年配の女性たちの助け合い精神など高貴な面は讃え、他方、俗物根性など醜い面もユーモアや皮肉を交えつつ、指摘する。読者はメアリのこのような善意に心温まり、批判精神に胸のすく思いがするであろう。

メアリは現在はクランフォードの住民ではない。従って、この町の出来事を第三者の立場でみることもできるが、事が起きると健康なメアリは自分もその渦中に入ってこの町の人々と一緒に喜び、悲しみ、悩み、憤る。つまり、傍観者の立場はとっていない。この立場が小説作法上よい点は、クランフォードの住民の喜怒哀楽がメアリによって直接読者に伝えられ、読者もこの感情を共有できる点であろう。悪い点は、語り手としての公平さ冷静さに欠け、この田舎町の出来事を客観的に報告することが難しくなる点であろう。

このようなメアリと比べて、マーガレットが異なっている最大の点は体が不自由なことである。マーガレットは自ら行動を起こして取材してまわることはできない。自分の周囲を観察することと、人から聞いた話から世の中の動きを読者に語るより他ない（このような語り手の不利な状況をギャスケルは種々の工夫で克服していることはすでに述べた）が、このハンディキャップが逆にマーガレットにハンベリー村の出来事を距離をおいてみることを可能にし、出来事を読者に客観的に伝えるのを容易にしている。

メアリもマーガレットもどちらも20歳前後であるが、『クランフォード』では時系列的に話が進んでいく。つまり若いメアリが青年の視点でみたままを読者に語り伝えていく。若いだけに迂闊なこともあろうが、生気が溢れている。それに対し、「ラドロウの奥様」ではマーガレットが若いときに起きた出来事を、何十年も後になって老婦人になったマーガレットが読者に語っていく。時を隔てて過

去を振り返って語るほうが、現時点で感情のままに語るよりは確かに客観性は保てる。

ギャスケルは「ラドロウの奥様」において、語り手が語る内容の客観性を重視して視点をマーガレットのような人物に置き、しかも過去の出来事を語らせるようにしたのであろう。

V

生涯確固たる信仰心を持ち続けたユニテリアンのギャスケルにとって、人生で最も大切なことは「イエスを模範とする愛の実践」によって信仰を全うすること[12]であったといえよう。小説執筆においてもこの「愛の実践」という信仰思想を何らかの形で読者に伝えようとしている[13]。ところが、「ギャスケルは説教壇に立っている」[14]とまで非難されるほどにこの信仰のテーマが露骨に小説の表面に浮かび上がっていることがある。

ギャスケルが一人称の語りの視点を採り入れた狙いは、このような作者のあからさまな思想、つまり信仰のテーマが如実に作品中に表れ、現実感や読者の興味をそぐのを防ぐためであったように思える。ギャスケルの最初の短篇小説とされている "Libbie Marsh's Three Eras" (1847) では「愛されるより愛すること」という信仰のテーマ[15]が全知の視点、つまり作者によって語られていく。リビーという若いお針子が他人を愛することで生きがいを見いだしていく心温まる物語である。しかし、いかに作者がその説教調を控えめにしようとしても作者が小説世界から教訓を述べようとしているのが読者に感じられる[16]。現実の世の中では小説家が読者に語りかけることはあり得ないことなので不自然であるし、また作者の主張に同感しない読者ならば不快感を覚えるのは必定であろう。

このような弊害を避けるためにギャスケルは、視点を作中人物のひとりに置いて、作者の姿を小説世界から消し、このひとりを「私」として小説世界の出来事を語らせる一人称小説を試みたと思われる。"The Poor Clare" (1856) では、重大な罪を犯した主人公が生涯をかけて罪を償っていくうちに、キリストが示した最も大切な教えとは「愛と赦し」の実践であることを悟る、つまり信仰のテーマが扱われている[17]。この一人称小説は上記の初期作品に比べると、少なくと

も語り手が作者でなく、しかも主人公でない脇役が「私」となっているため、作者が小説世界に登場するという非現実的な状況はないし、また作者が読者に教訓を押し付けることはない。だがそれでも作者から発せられる信仰のメッセージは明瞭に感じられ、ややもすると説教臭が鼻につく恐れがある。

「ラドロウの奥様」のテーマは、表面的には「民主化」と纏められよう[18]。宗教界の民主化は3代の教区牧師を対比させることによって、また教育界のそれは、昔は村になかった庶民学校が設立されることによって、また階級間のそれについては、この小説の終わり近くで開かれたパーティーで3階級の人々が一同に集ったことを通して、それぞれ明示されている。また旧弊な階級制度の崩壊は、牧師グレイ氏が私生児ベシー（Bessy）と、元英国海軍軍人ジェイムズ大佐が商人ブルック氏の娘と結婚することによって、はっきりと示されている。このため、この社会的テーマは読者には読みとりやすいといえよう。

ところが、ギャスケルはこの作品の根底に「人間は間違いを犯すものだが、キリスト教的愛により克服できる」という信仰のテーマを据えているのである[19]。それは、高慢であったことから偏見を抱くという間違いを犯していたラドロウ夫人が神の愛の笞、人々が実践する愛に触れて、自己の過ちを悟り、改めていくという主人公の変化に暗示されている。しかし、これは社会的テーマほど明瞭に表されていない。そのため読者にはこの信仰のテーマは読みとりにくい。しかし、読みとりにくくすることこそが、作者ギャスケルのこの小説の狙いであるように思える。教訓癖をしばしば指摘されていたギャスケルとしては、一人称の視点を採用し、それに工夫を加えて小説世界に現実感を醸し出しながら、作者の信仰観を小説の表に出さずに、示し得るからである。

おわりに

ヘンリー・ジェイムズ（Henry James, 1843-1916）が小説において視点の問題を追究し、作中人物のひとりに視点を集中させる手法を完成させた[20]ことは衆知のことである。このジェイムズ[21]に先駆けてギャスケルは「ラドロウの奥様」において、視点にさまざまな工夫を凝らして小説世界をできる限り現実世界に近づけ、しかも作者が小説世界に登場して教訓を垂れるなどという非現実的な状況

や、読者に不快感を与える恐れのある状況は極力避けつつ、自分の思想を小説中に巧みに溶かし込んだことは高く評価できる。

[注]

1) Leon T. Dickinson, *A Guide to Literary Study* (Tokyo: Nan'un-do, 1962), p.32.

2) 内田能嗣「『嵐が丘』における「語り」の構造」、内多毅監修『イギリスの語りと視点の小説』(東京, 東海大学出版会, 1983年), p.49.

3) *Ibid.*

4) David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation* (London: Constable & Co., 1934), pp.185-86.

5) Edgar Wright (ed.), Elizabeth Gaskell, *My Lady Ludlow and Other Stories* [The World's Classics] (Oxford: Oxford University Press, 1989) 中のページ数である。以後、同書からの引用箇所は、引用の最後の ( ) 内に付す。また、同書を *My Lady Ludlow* と略す。

6) Dickinson, p.32.

7) 足立万寿子「小説 *Mary Barton* における手法と作者の人間観」、『明の星女子短期大学紀要』, No.10 (1992), 28.

8) J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (ed.), *The Letters of Mrs Gaskell* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1966), p.541.

9) John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works* (Fontwell: Linden Press, 1970), pp.276-77.

Enid L. Duthie, *The Themes of Elizabeth Gaskell* (London: Macmillan, 1980), p.191.

Edgar Wright, *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (London: Oxford University Press, 1965), p.156.

10) *My Lady Ludlow*, p.XIV.

11) Sharps, pp.277-80.

Duthie, p.191.

Edgar Wright, p.155 & pp.159-60.

Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber and Faber, 1993), p.468.

Margaret Ganz, *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict* (New York: Twayne

Publishers, 1969), pp.155-61.

12) 巽豊彦「ニューマン兄弟とギャスケル夫人」、石井正之助編『饗宴 ──英学随想・評論集──』(東京, ドルフィン プレス, 1990年), p.137.

13) Duthie, pp.180-81.

14) A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (London: John Lehmann, 1952), p.89.

15) 足立万寿子「「リビー・マーシュの三つの節目」にみられる愛」、『広島文教女子大学紀要』第31巻 (1996), 66.

16) *Ibid.*, 72.

17) 足立万寿子「"The Poor Clare" に見られる「愛と赦し」」、*Soundings*, No.19 (1993), 69-82.

18) 足立万寿子「「ラドロウの奥様」にみられる愛」、『広島文教女子大学紀要』第32巻 (1997), 41-43.

Terence Wright, *Elizabeth Gaskell 'We are not angels': Realism, Gender, Values* (London: Macmillan, 1995), pp.125-26.

19) 足立万寿子「「ラドロウの奥様」にみられる愛」, 33 & 43.

20) 大津栄一郎「ヘンリー・ジェイムズとその文学 ──後期 (一八九六年──一九一六年)」、高橋正雄編『ヘンリー・ジェイムズ研究』(東京, 北星堂, 1966年), pp.118-19.

21) Angus Easson (ed.), *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage* (London: Routledge, 1991), p.465 において、ジェイムズは雑誌 *The Nation* (22 February 1866) に寄せた *Wives and Daughters* (1864-66) についての書評のなかで、「ギャスケルはひたすらシンシアの日常生活の無数の些細な事実を記録することに徹し、結論を引き出すのは読者に任せている」と、ギャスケルのこの作品の手法の特徴を述べ、ギャスケルを高く評価している。「ラドロウの奥様」で試みられた外面描写とエピソードを積み重ねる手法がさらに磨きをかけられ、ギャスケル最後の長篇小説 *Wives and Daughters* において一層の円熟味を増したのではないかと思う。